

『諸道聴耳世間狙』における演劇作品の利用について

——三之巻三「雀は百まで舞子の年寄」の舞子宇治江の人物造形を中心に——

王 欣

はじめに

明和三年（一七六六）に出版された上田秋成の浮世草子作品『諸道聴耳世間狙』^①（以下「世間狙」と略称する）は短篇十五話からなる。

その『世間狙』三之巻三「雀は百まで舞子の年寄」の舞子宇治江の人物造形に関して、徳田武氏は、『世間狙』三之巻三の「長橋の局へ繪旨受にいたやうなどの悪口」という内容に注目し、正慶尼が二十一歳から二十六歳まで、長橋局のもとで祐筆役を務めていたという事実を手掛りにし、舞子宇治江が正慶尼をモデルにしていると述べた^②。後に、日野龍夫氏は、「長橋の局へ繪旨受にいたやうな」という一句は、実在の正慶尼についての当てこみではありえても、正慶尼が長橋の局に仕えたのは若い時のことなだから、作中にお

いて宇治江が老妓であることをからかう「悪口」ではありえない」と指摘し、徳田氏はその解釈に賛同しなかった^③。確かに日野龍夫氏に指摘されたように、『世間狙』三之巻三の「長橋の局へ繪旨受にいたやうなどの悪口」という設定を、安易に若い時の正慶尼が長橋局に仕えたことがあるという事実と結び付けるのは妥当ではない。

宇治江の人物造形と実在の人物との関連性を検討する論説のほか、森山重雄氏や日野龍夫氏は、本文の詞章の共通点及び趣向の類似性から、『世間狙』三之巻三の宇治江の人物造形における、演劇作品謡曲『卒塔婆小町』、『御所桜堀川夜討』（以下『堀川夜討』と略称する）、『釜淵雙級巴』（以下『釜淵』と略称する）、『小野小町都年玉』（以下『都年玉』と略称する）、『大和歌五穀色紙』（以下『五穀色紙』と略称する）、『七小町』、『昔男春日野小町』からの影響を分析してきた^④。

しかしながら、これらの『世間狙』三之卷三の宇治江の人物造形に関する論述は、宇治江の人物造形における個々の趣向の出典を検討する段階に止まっている。管見の限り、従来の研究では、物語の展開にしたがって、宇治江の人物像を、全体的に考察した研究はまだ行われていない。そして、『世間狙』三之卷三の宇治江と僧との問答は、本文の詞章において、先行研究によれば、謡曲『卒塔婆小町』、『都年玉』、『五穀色紙』と関連している。ところが、物語の展開にしたがって、詳細に本文を検討すれば、宇治江の人物造形と、謡曲『卒塔婆小町』の小野小町、『都年玉』の小野小町、『五穀色紙』の小野小町との相違点が見えてくる。また、先行研究では、『世間狙』三之卷三の宇治江の一夜孕みという場面と関連する演劇作品として、『堀川夜討』、『釜淵』、『七小町』、『昔男春日野小町』が挙げられている。しかし、宇治江の一夜孕みという場面を一層詳しく考察すれば、この場面と最も強い関連性を持つ演劇作品が明らかになるだろう。右記のような問題点を解決するため、『世間狙』三之卷三と演劇作品との関連性について、再検討する必要があると思われる。

本稿では、こうした現状をふまえて、『世間狙』の開板願書が出された時期明和元年十一月までに、上方で上演された演劇作品に注目して考察を加える。さらに、物語の展開にしたがって、僧との問答

及び一夜孕みという二つの場面を分析し、『世間狙』三之卷三の宇治江の人物造形は、実は『七小町』のお蘭の方の人物造形と一致するのではないかという問題について検討してみたい。

一 僧との問答

従来の研究では、本文の詞章における、『世間狙』三之卷三の宇治江と智積院の僧との問答と、謡曲『卒塔婆小町』の小野小町と高山の僧との問答との関連性が検討されてきた。また、謡曲『卒塔婆小町』の教義問答が、『世間狙』三之卷三で色欲問答に転じられるパロディの面白さについても言及された。本文の詞章の関連性において、確かに両者が非常に似通っている。ただし、物語の展開、人物造形から見れば、両者はどんな関連性を持っているだろうか。『世間狙』三之卷三の宇治江が智積院の僧と問答する場面では、五十過ぎの舞子宇治江が智積院の僧を相手に、『関寺小町』を歌う内容が見られる。

宮川町の丹波屋で、三味線継で本調子に合せつ、哥はづかしや人の恨みのつもりきて。たのむ物には竹の杖泣つ笑ふつ物ぐるひと。関寺小町を諷ひ出せば。客は智積院の出家達。ヨウウくうたふてく。長橋の局へ繪旨受にいたやうなどの悪口に。一人の和尚が是く老女。そもじが諷ふは小町が年寄物物

もらいになった文句。こなたが弾と正真の小町が出現したやうで気がめいる。何ぞはんなりとした物をと望めば。宇治江少しむつとした顔。不粹な事をおつしやるお方々。哥によそへて年寄をお嫌ひなされますれど。^②たとへ深山の朽木でも花さく春もござんした。わたしも盛りは過ましたれど。心の花がかわらねばこそ。かふしたはでな勤を致してをります。墨に染てもお心に色香があるゆへの米交はりなされますのではないかへと打こまれて。二人の僧起なをりて。それ地水火風空の五ツは人の鉢心はかわらぬといやれども像も声もかはるからは。(略)

(『世間狙』三之巻三)(傍線引用者)

この場面の展開は、左記の通りである。

- ① 宇治江は智積院の僧を相手に『関寺小町』を歌う。
- ② 智積院の僧は、宇治江が自分の年齢・身分に不相応な派手な勤めをする様子を見て、宇治江を教化しようとする。

③ 宇治江と智積院の僧との色欲に関する問答が始まる。

この場面では、宇治江が『関寺小町』を歌い出せば、智積院の僧は「そもじが諷ふは小町が年寄て物もらいになった文句。こなたが弾と正真の小町が出現したやうで気がめいる。何ぞはんなりとした物」を歌ってほしいと文句を言う。智積院の僧が言ったように、『関寺小町』が年をとった小野小町が昔を懐かしく思い、今を嘆く

歌なので、宇治江が客の前でこのような悲しい歌を歌い出すのは、確かにその場の雰囲気合わない。

ここで注目したいのは、どうして『世間狙』三之巻三で、宇治江が歌う歌謡が『関寺小町』に設定されたのかという点である。

『日本歌謡集成』巻八の『新大成絃の調』の「うたひ本てうしの部」の三一七番に『せきでら小町なうた』が収録されている。

三一七 関寺小町

長うた

思ひいづればなつかしや、人のうらみのつもり来て、いつのころより、うかれいで、たのむものにはたけのつえないつわらうつものぐるひと、人はあだしの夢なれや、とふはうらめしむかしは小町、今はすがたも、はづかしや合たれとはねどせきでらの、いほりさみしきをりくは、都の町に、たちいで、ゆき、の袖にすがりつ、浮き事の數々を見給へやひとく合春はこずゑの花にのみ、心をよせてみじか夜は、ほと、ぎすゆきみぐさ、あさざはのかきつばたあやめ、ものはなかれそめてはたるもうすく、のこるあしたの名もひろさはの月影、かこちがほなるわがなみだ、おちば、しぐれに合ぬれそめて、われながらはづかし三下りも、夜しのぶのかよひぢは、雨のふる夜もふらぬ夜も、ましてゆきしもいとひなく合心づくしに身をくだく、ひと夜をまたでししたりし深草の少将の、そのをんねんのつき

そひて、かやうにものを思ふぞやあなたへはしり、こなたへはしり、ざらりくざらりくざつと、こひえぬときには合あくしん、またきやうらんの心づきて、こゑかはりけしからず見ゆればすこくと關寺のいほりにかへるありさまは、やまだの畔のかゞしよの、あきはてたりなわがすがた。

〔新大成糸の調〕（傍線引用者）

『せきでら小町ながうた』には、「なつかしや、人のうらみのつもり来て」、「たのむものにはたけのつえないつわらうつものぐるひと」という詞章がある。その詞章を『世間狙』三之卷三の詞章「哥はづかしや人の恨みのつもりきて。たのむ物には竹の杖泣つ笑ふつ物ぐるひと」と対照すれば、冒頭部分の「なつかしや」と「はづかしや」との相違を除けば、両者が一致している。よつて、『世間狙』三之卷三のこの場面で、宇治江が歌う歌謡が長唄「関寺小町」だと判断できる。さらに、『世間狙』三之卷三で、智積院の僧が宇治江に、「ヨウくうたふてく」と言うので、宇治江は長唄「関寺小町」を引き続き歌つたと考えられる。

長唄「関寺小町」の展開は左記の通りである。

イ 小野小町は、深草少将との恋を懐かしく語る。

ロ 小野小町は、深草少将の怨念にとりつかれ、正気を失うように走り回る。

右記の『世間狙』三之卷三の宇治江と智積院の僧と問答する場面の展開に、長唄「関寺小町」の展開を付け加えると、『世間狙』三之卷三のこの場面の展開は次のようになる。

① 宇治江は智積院の僧を相手に長唄「関寺小町」を歌う。

〔長唄「関寺小町」の展開〕

イ 小野小町は、深草少将との恋を懐かしく語る。

ロ 小野小町は、深草少将の怨念にとりつかれ、正気を失うように走り回る。

② 智積院の僧は、宇治江が自分の年齢・身分に不相応な派手な勤めをする様子を見て、宇治江を教化しようとする。

③ 宇治江と智積院の僧との色欲に関する問答が始まる。

従来の研究では、『世間狙』三之卷三の宇治江と智積院の僧との問答と、謡曲「卒塔婆小町」の小野小町と高野山の僧との問答との関連性が検討されてきた。

謡曲「卒塔婆小町」^⑤の展開は左記の通りである。

① 老女となった小野小町は、深草少将との恋を懐かしく語る。

② 高野山の僧は、卒塔婆に腰をかけている小野小町を見て、小野小町を教化しようとする。

③ 小野小町と高野山の僧との教義問答が始まる。

④ 小野小町は、深草少将の怨念にとりつかれ、正気を失うように

になる。

物語の展開から見れば、『世間狙』三之卷三のこの場面で、宇治江の行動は、ほぼ謡曲『卒塔婆小町』の小野小町の行動と共通している。ところが、先行研究に指摘された、『世間狙』三之卷三の色欲問答と、謡曲『卒塔婆小町』の教義問答との相異のほか、『世間狙』三之卷三の宇治江が歌う長唄「関寺小町」には、小野小町が深草少将の怨念にとりつかれ、正気を失うように走り回る場面がある。謡曲『卒塔婆小町』では、小野小町が深草少将の怨念にとりつかれ、正気を失うようになるだけである。小野小町が走り回る場面の有無において、両者は一致しない。また、『世間狙』三之卷三の宇治江が男の子を産んだ女性であるという身分は、謡曲『卒塔婆小町』の結婚したことがない小野小町と違う。

そのほか、前掲の日野龍夫氏の論説に、謡曲『卒塔婆小町』の教義問答を色欲問答に転じるパロディーが、浄瑠璃『都年玉』、『五穀色紙』にも見出せるという指摘がある。

その『都年玉』三段目「小町少将道行」では、帝が春宮の花照宮に譲位し、小野小町をその後とするという勅詔を下し、すでに深草少将有平と恋仲の小町は、仲を割かれることを悲しむ。小野小町と深草少将は駆落ちをし、化野に着くと、二人の鉢敲きに出会う。小町は少将を繁みに隠し、死んだ馴染み客の妄執にとりつかれて物狂

いとなった島原の傾城音羽になりすまし、鉢敲きと色欲問答を展開する。一方、『都年玉』三段目「小町少将道行」とほぼ同文の『五穀色紙』^①の二人の鉢敲きと出会う場面で、小野小町と共に駆落ちをする深草少将は、贖物狂いになり、鉢敲きと問答する。

『世間狙』三之卷三で、僧と問答する宇治江は女性であるが、『五穀色紙』で、鉢敲きと問答する深草少将は男性である。つまり、主人公の人物設定から見れば、『世間狙』三之卷三の舞子宇治江が僧と問答する場面は、『五穀色紙』の深草少将が贖物狂いになって、二人の鉢敲きと問答する場面と完全に違う。

ところで、『都年玉』三段目の小野小町と鉢敲きと問答する場面の展開は、左記の通りである。

- ① 鉢敲きを騙すため、小野小町は死んだ馴染み客の妄執にとりつかれて物狂いとなった島原の傾城音羽になりすまし。
- ② 小野小町は傾城音羽になりすまし、馴染み客との恋を懐かしく語る。

- ③ 鉢敲きは、卒塔婆に腰を掛けている小野小町の話聞いて、小野小町を教化しようとする。

- ④ 小野小町と鉢敲きとの色欲に関する問答が始まる。

物語の展開から見れば、『世間狙』三之卷三の宇治江が僧と問答する場面は、僧と色欲問答をするという点において、『都年玉』三

段目の小野小町が鉢敲きと問答する場面と一致している。また、『世間狙』三之巻三で、僧は宇治江が自分の年齢・身分に不相応な派手な勤めをする様子を見て、宇治江を教化しようとする。『都年玉』三段目で、鉢敲きは卒塔婆に腰を掛けている小野小町の話聞いて、小野小町を教化しようとする。すなわち、主人公の女性の非常識な行動に対し、僧は主人公の女性を教化しようとするという点において、両者が合致している。

ところが、『世間狙』三之巻三の宇治江が歌う長唄『関寺小町』には、小野小町が深草少将との恋を懐かしく語る場面がある。『都年玉』三段目では、小野小町は傾城音羽になりすまし、馴染み客との恋を懐かしく語る。つまり、主人公の女性が僧に懐かしく語る内容において、両者が一致しない。また、『世間狙』三之巻三の宇治江が歌う長唄『関寺小町』には、小野小町が深草少将の怨念にとりつかれ、正気を失うように走り回る場面がある。それに対して、『都年玉』三段目の小野小町は、死んだ馴染み客の妄執にとりつかれて物狂いとなった島原の傾城音羽になります。すなわち、主人公の女性が物狂いとなる原因において、両者が異なっている。さらに、『世間狙』三之巻三の宇治江が男の子を産んだ女性であるという身分は、『都年玉』の結婚したことがない小野小町と違う。

小町物を調べてみれば、謡曲『卒塔婆小町』のパロディーは、浄

『諸道聴耳世間狙』における演劇作品の利用について

瑠璃作品『七小町』^①五段目「卒塔婆小町」でも見られる。

ハル夢の浮世の中中々にウ人は八雲のハル皇子共。いさ白露の玉襷^③高野聖の姿中となり。(中略)「天和詞やあは成童共。有名は呼びでお吉く。お吉とは何故呼子鳥。お蘭と云名を知らぬよなふ。文弥上実理や。ウお蘭といふもウお吉といふも。ウ物狂はしき片名召。中男女の。花ならでくねる。ウ心の帚木も。ハツミフシ今のつらさは。ナラス思ひ知るらん。ウ蘭の香も移ろひ果。ウ拔捨られし藤袴恨の刃はハル末黒の薄。小野とは言はじ己が穂風の吹に付ても。中あなめく目星に散つく面影の。^①合我や恋ふらし九十九髪。言ふて帰らぬ思ひの数々。合百敷や文弥ハル大内山の山守も。恋の敵を狙ふ身はウよ。もや咎めじウいざ参らふ」と。ウ跡に群る幼子供に打て中か、れば。二人ウばらくばつと彼方へ走り此方へ走り。(中略)経や月日の駒中の足。乗たはく殿様お馬と卒塔婆に跨るハル乱れ心。^②天和狂女も共に一疋のウ馬に引る、千疋手綱。

(中略)

^③式地ウ八雲の皇子興覚顔。「ウ仏体色相の卒塔婆を以てハル心を慰む浅ましきよ。ウ教化せんとは思へ共何を言ふても乱れ心。ウ蛙の面に水ならん是非もなし。詞今一人の女が有様。正しく人の憑添ふ詞。如何成ル者ぞ名を名乗懺悔せよ。跡弔ひて得

『諸道聴耳世間狙』における演劇作品の利用について

さすべし。』

①「天和上懺悔せよとは中有難や。ウ世を捨人と言ひながら京童のハル戯にも。ウ高野聖に宿賃してウ娘はし取る、など。歌れ給ふ中恋路の所縁。風の伝にもフシ聞及び給ふらん。」^①ウ小町に心を懸し者は多き中にもハル深草の。椎柴ならで身を焦すウ小野の炭釜煙は風に。キン中靡き合たるハル二人が中を。裂は杵の森中の下露。ウ雨の夜も風の夜も木の葉の時雨ハル雪深し。軒の玉水とくくくと。ハツミ往きては帰りフシ帰りては。フシハル指折数へ。中七夜八夜九夜。ウ豊の明の節会にも冷泉逢でぞ。ハル通ふ。鶏の。時をも変ず暁の。中ウ榻の端書百夜も既にハル通ひ詰たり色九十九夜。中今は一夜の嬉しさにウ思ひは晴てもハル春の夜の。闇は文無し氷の刀。中ウ思ひ懸なく刺通さるれば。あら苦しハル目眩や胸苦しやと悲しみて。一夜を徒に死たりし。^②ウ深草の少将の。その怨念がウ憑添て。ステテ小町が母を狂す中ぞや」

（『七小町』五段目）（傍線引用者）

『竹本座浄瑠璃集』（一）の「解題」によると、浄瑠璃作品『七小町』の五段目では、大和太夫がお蘭の方を、政太夫が父の丸太夫の役を受け持ち、語り分けていた。そのため、本文中「大和」と表記されている内容は、お蘭の方のセリフである。

『七小町』五段目「卒塔婆小町」におけるお蘭の方に纏わる物語

の展開は左記の通りである。

- ① お蘭の方は、小野小町と深草少将との恋を懐かしく語る。
- ② お蘭の方は、深草少将の怨念にとりつかれ、正気を失うように走り回る。

- ③ 高野聖姿の八雲皇子は、卒塔婆に跨っているお蘭の方の話を聞いて、お蘭の方を教化しようとする。

- ④ お蘭の方と高野聖姿の八雲皇子との色欲に関する問答が始まる。

右記のように、『七小町』五段目「卒塔婆小町」は、ほぼ謡曲『卒塔婆小町』のパロデーである。ところが、『七小町』五段目で、深草少将の怨念にとりつかれ、正気を失うように走り回るお蘭の方の様子が、「彼方へ走り此方へ走り」と表現されている。そのような文句は、謡曲『卒塔婆小町』にも、謡曲『関寺小町』にも見当たらないが、長唄『関寺小町』では、小野小町の走り回る様子が、「あなたへはしり、こなたへはしり」と記述されている。それ故、『七小町』五段目のお蘭の方が深草少将の怨念にとりつかれ、正気を失うように走り回る場面は、長唄『関寺小町』の小野小町が深草少将の怨念にとりつかれ、正気を失うように走り回る場面と符合していると考えられる。

『世間狙』三之三の卷三の宇治江が僧と問答する場面を、『七小町』五

段目のお蘭の方が高野聖姿の八雲皇子と問答する場面と比較すれば、宇治江が歌う長唄『関寺小町』に、小野小町と深草少将との恋を懐かしく語る内容がある。それと同じ『七小町』五段目にも、お蘭の方が小野小町と深草少将との恋を懐かしく語る内容がある。また、『世間狙』三之巻三の宇治江が歌う長唄『関寺小町』には、小野小

表1

『世間狙』三之巻三 宇治江	謡曲『卒塔婆小町』 小野小町	『都年玉』 小野小町	『七小町』 お蘭の方
小野小町と深草少将との恋を懐かしく語る	○	×	○
深草少将の怨念にとりつかれる	○	×	○
正気を失うように走り回る	×	×	○(※)
僧は主人公の女性の非常識な行動に対し、主人公の女性を教化しようとする	○	○	○
僧と色欲問答をする	×	○	○
男の子の母親である	×	×	○

(※)『七小町』五段目のお蘭の方が深草少将の怨念にとりつかれ、正気を失うように走り回る場面は、長唄『関寺小町』の小野小町が深草少将の怨念にとりつかれ、正気を失うように走り回る場面と一致している。それ故、『世間狙』三之巻三の宇治江と、『七小町』のお蘭の方は、長唄『関寺小町』の小野小町が深草少将の怨念にとりつかれ、正気を失うように走り回るという場面を利用したという点において合致している。

『諸道聴耳世間狙』における演劇作品の利用について

町が深草少将の怨念にとりつかれ、正気を失うように走り回る場面がある。『七小町』五段目にも、お蘭の方は、深草少将の怨念にとりつかれ、正気を失うように、走り回る場面がある。しかも、先程検討してきたように、『七小町』五段目のお蘭の方が深草少将の怨念にとりつかれ、正気を失うように走り回る場面は、長唄『関寺小町』のこの場面と符合している。よって、宇治江の人物造形もお蘭の方の人物造形も、長唄『関寺小町』の小野小町が深草少将の怨念にとりつかれ、正気を失うように走り回るという場面から影響を受けている。そのほか、『世間狙』三之巻三で、僧は宇治江が自分の年齢・身分に不相応な派手な勤めをする様子を見て、宇治江を教化しようとする。『七小町』五段目で、高野聖姿の八雲皇子は、卒塔婆に跨っているお蘭の方の話を聞いて、お蘭の方を教化しようとする。すなわち、主人公の女性の非常識な行動に対し、僧は主人公の女性を教化しようとするという点において、両者が同じである。そして、『世間狙』三之巻三の宇治江と僧との色欲問答も、『七小町』五段目のお蘭の方と高野聖姿の八雲皇子との色欲問答と類似している。さらに、『世間狙』三之巻三の宇治江は石河五郎市の母親である。同じく、『七小町』のお蘭の方は深草少将の母親である。つまり、男の子の母親であるという点において、『世間狙』三之巻三の宇治江は、『七小町』のお蘭の方と合致している。

上述した内容をまとめ、『世間狙』三之卷三の宇治江と僧と問答する場面で、宇治江の人物造形と諸演劇作品との関連性を整理する。

表1のように、物語の展開及び人物造形から見れば、『世間狙』

三之卷三の宇治江と僧と問答する場面で、宇治江の人物造形は、『七小町』五段目のお蘭の方の人物造形と符合している。

二 一夜孕み

『世間狙』三之卷三では、宇治江が一夜孕みで、男の子を出産するという設定も見られる。

扱此宇治江が卅四五の比。庚申の夜祇園町の一力で大よせの^①喉寝に。^②鬼若の弁蔵といふ幫間にくどかれて。たつた一度で^③其種を孕み、産おとせしは玉のやうな男の子。^④(中略)庚申の夜にやどる子はと下世話にいふにちがひなく。^⑤

(『世間狙』三之卷三)(傍線引用者)

『世間狙』三之卷三の一夜孕みの場面と関連する演劇作品について、森山重雄氏は、『堀川夜討』三段目「堀川御所」の弁慶上使、『釜淵』を指摘した。^⑥また、日野龍夫氏によって、『七小町』、『昔男春日野小町』が挙げられている。^⑦しかしながら、『世間狙』三之卷三の一夜孕みの場面には、いくつかのキーワードが含まれているため、それらのキーワードを基準にし、『世間狙』三之卷三の一夜孕

みの場面と関連する演劇作品を再検討する必要があると思われる。『堀川夜討』^⑧三段目「堀川御所」の一夜孕みの場面は左記の通りである。

詞私はもと西の国の在所者。親は所の何がし。十八年以前頃は夜も長月の。地ウ卅六夜の月待の夜。ウ私が所はハル諸方の入込み。ウ誰とは知らず袖を引かれてあの、もの、を言ふ間もなく。暗がりまぎれのつい転び寝。ウつらや人の足音に中驚ひて。ウ其人は起き行袂をとらゆる拍子ハル行々拍子。ウちぎれて我手に残りしは此中振袖。ウ仮り寝の情はたつた一チ度のハル浅中けれ共。ウ妹背の縁やフシ深かりけん。地ウ其月よりハル身も重く色懐胎し。詞友達衆の介抱にて生み落せしは此信夫。(中略)卅六夜の仮り寝はそなたで有たな。「エイ其時のお前の名は。」「ヲ書写山の鬼若丸。」「すればお前は娘が父御。其父御が又娘をば。」「ヲ殺したは身替りお主の役に立るはい。」「ハア地色ハル悲しけれ共夫なれば恨はない。ウ是なふ娘尋たそなたの父御といふは上弁慶様。ウ御対面申あぎやいの」と。

(『堀川夜討』三段目)(傍線引用者)

『釜淵』^⑨下之卷の一夜孕みの場面は左記の通りである。

若き時分月も忘れず正月庚申の日、お館は庚申待、奥女中に戯れ、一夜の契りに子胤をおろし、産れたは月足らず九月廿日、

又是も庚申の日、庚申の夜盗みすれば顯れ、其夜懐胎の子は必ず盗みするとの俗説、信するに足らねども、里に遣れば突戻す、養子に遣れば目遣ひ悪いと嫌ふて貰人無し、仕官の身の是非も無く、此里の野端れに捨て、河内の土民を頼み、拾ひ養ひ貰ひしが、人と成つて都へ登り俗説に違はず

〔釜淵〕下之巻）（傍線引用者）

『七小町』四段目の一夜孕みの場面は左記の通りである。

詞自はもと深草の丸太夫とて土器師の娘大まかな父育ち十八の生めき盛り。徒な気が付キ初め男欲さの神祈。昔より有来る大原の雑魚寝とて。大年の闇き夜に。男女が思ひく／＼拜殿に雑魚寝して神に任する殿結び。若いやら年寄やら顔も見ず名も聞ずまして所も知らぬ同士。盲摺みに肌触れて枕交すが所の習ひ。我も其夜は誰共知らず。寝て別れ路の私語。耳に留まり身に残るは能々の縁でかな。地色中ついお腹に滞隠すにもハル隠されぬ。父様の介抱にてウ父なし子を設中けしは。（中略）地色ウ今深草の少将とウ名乗其方はハルほんの我子。

（『七小町』四段目）（傍線引用者）

『昔男春日野小町』三段目の一夜孕みの場面は左記の通りである。

世の中に恋といふことが法度なら、いつそかうした憂き目はあるまい。この母ももとは奈良の京春日の里のなにがしが娘なる

『諸道聴耳世間狙』における演劇作品の利用について

が、年たけるまで男選びに日を送りしに、誰とも知らず、忍摺の狩衣に歌を書いて贈る男あり。いかなる縁にや、身にしみじみとなつかしく、同じく返歌を書き付けやる。それを互ひの仲人にて、一夜の契りに懐胎したがあのお露。いたづら者と父の勘当、あの子を連れて家を出で、光孝天皇の後の乳母とは成たれども

（『昔男春日野小町』三段目）（傍線引用者）

『世間狙』三之巻三の宇治江の一夜孕みの場面からキーワードを六つ取り出し、その六つのキーワードを基準にし、先行研究に指摘された『世間狙』三之巻三の宇治江の一夜孕みの場面と関連する諸演劇作品を、『世間狙』三之巻三と比較してみる。

表2のように、『世間狙』三之巻三の母親としての宇治江の立場に立って、雑喉寝の一度の契りで男の子を孕むという話を回想する設定は、『七小町』四段目の母親としてのお蘭の方の立場に立って、雑喉寝の一度の契りで男の子を孕むという話を回想する設定と一致する。そして、個々の趣向の利用において、『世間狙』三之巻三の庚申の夜に男の子を懐胎するという趣向は、『釜淵』と関連している。また、一夜の契りの相手が鬼若の弁蔵であるという趣向は、『堀川夜討』を示唆している。

一方、『世間狙』三之巻三の母親としての宇治江の立場に立って、一夜孕みの話を述べるとい設定は、『昔男春日野小町』三段目の

『世間狙』三之卷三 宇治江	『堀川夜討』 おわさ	『釜淵』 女中	『七小町』 お蘭の方	『昔男春日野小町』 衣手
①宇治江(母親の立場に 立つて述べる)	○	×	○	○
②雑喉寝	×	×	雑喉寝 (*)	×
③鬼若の弁蔵との契り	鬼若丸弁蔵 との契り	×	×	×
④一度の契りで懐妊する	○	○	○	○
⑤男の子を出産する	×	○	○	×
⑥庚申の夜にやどる子	×	○	×	×

(*)「ざこ」の漢字表記は、「雑魚・雑喉」である。本稿で、「ざこね」の漢字表記は、引用文を除けば、便宜上すべて『世間狙』三之卷三の「雑喉寝」で記されている。

衣手の話の中でも見られる。ところが、表2のように、雑喉寝、鬼若の弁蔵との契り、男の子を出産する、庚申の夜にやどる子というような特殊な項目において、『世間狙』三之卷三の宇治江は、『昔男春日野小町』三段目の衣手と異なる。それ故、『世間狙』三之卷三の宇治江の一夜孕みの場面は、『昔男春日野小町』三段目の衣手の一夜孕みの場面とあまり関連していないと言える。

要するに、『世間狙』三之卷三の宇治江の一夜孕みという場面で、宇治江と『堀川夜討』のおわさ、『釜淵』の女中との関連性は、

個々の趣向の類似に止まっている。それに対して、『世間狙』三之卷三のこの場面の宇治江と、『七小町』四段目のお蘭の方においては、個々の趣向の類似性のみならず、二人に纏わる物語の展開も、最も強い関連性を持っているのである。

おわりに

以上、本稿ではまず、物語の展開にしたがい、『世間狙』三之卷三の宇治江が僧と問答する場面を考察した。その結果、この場面と関連している謡曲『卒塔婆小町』、『都年玉』、『七小町』の中で、宇治江の人物造形と一致しているのが、『七小町』五段目のお蘭の方の人物造形であるということが解明された。つぎに先行研究に指摘された、『世間狙』三之卷三の宇治江が一夜孕みで、男の子を出産するという場面と関連する『堀川夜討』、『釜淵』、『七小町』、『昔男春日野小町』を再検討し、この場面の宇治江の人物造形が、趣向のみならず、主人公に纏わる物語の展開においても、『七小町』四段目のお蘭の方の人物造形と最も強い関連性を持っていることがわかった。これらのことから、『世間狙』三之卷三の宇治江の人物造形と、『七小町』のお蘭の方の人物造形との関連性が一番強く表れていることが明らかになった。

『世間狙』の中に、演劇作品と関連する要素が数多く取り入れら

れている。ところが、従来、『世間狙』と演劇作品との関連性をめぐる考察が、人物像における個々の趣向の出典を検討する段階に止まっているため、『世間狙』と演劇作品との関連性は、必ずしも十分に吟味されているとは言えない。よって、今後続けて物語の展開にしたがい、『世間狙』と演劇作品との関連性を検証する必要があると考えられる。

注

- ① 『諸道聴耳世間狙』（『上田秋成全集』第七卷、平成二年八月二十五日、中央公論社）。
- ② 徳田武「秋成の隠微——『諸道聴耳世間狙』に即して——」（『文学』第五十巻第五号、昭和五十七年五月十日、岩波書店）。
- ③ 日野龍夫「秋成と時代物浄瑠璃」（『文学』第五十巻第十号、昭和五十七年十月十日、岩波書店）。
- ④ 森山重雄『上田秋成初期浮世草子評釈』（昭和五十二年四月三十日、国書刊行会）。
- ⑤ 日野龍夫「秋成と時代物浄瑠璃」（『文学』第五十巻第十号、昭和五十七年十月十日、岩波書店）。
- ⑥ 日野龍夫「秋成における歴史と人間」（『宣長・秋成・蕪村』、平成十七年五月、ぺりかん社）。
- ⑦ 『上田秋成全集』第七卷（平成二年八月二十五日、中央公論社）の「解題」によれば、明和元年十一月までに『世間狙』が脱稿された。また、高田衛氏の『上田秋成年譜考説』（昭和三十九年十一月、明善堂書店）によると、上田秋成は享保十九年（一七三四）に大坂で生まれ、明和元年十一月までに一度も江戸に下ったことがなく、主な生活拠点が上方に集中していた。
- ⑧ 森山重雄『上田秋成初期浮世草子評釈』（昭和五十二年四月三十日、国書刊行会）。
- ⑨ 森山重雄『上田秋成初期浮世草子評釈 補遺』（『人文学報』第一三三号、昭和五十四年三月、国書刊行会）。
- ⑩ 日野龍夫「秋成と時代物浄瑠璃」（『文学』第五十巻第十号、昭和五十七年十月十日、岩波書店）。
- ⑪ 神楽岡幼子『諸道聴耳世間狙』の挿絵（『国文学』第七十号、平成五年十二月、関西大学国文学会）。
- ⑫ 『日本歌謡集成』巻八近世編（平成元年三月二〇日、東京堂）の「解説」によれば、「寛延四年には『絲の調』が出たが、それが次第に増補せられ、明和安永天明の間に屢次改正せられて、遂に享和板の『新大成 絲の調』を見るに至り、（中略）他との権衡を考慮して享和元年板の新大成 絲の調を探ることに」した。
- ⑬ 謡曲『卒塔婆小町』（新日本古典文学大系57『謡曲百番』、平成十年三月、岩波書店）。
- ⑭ 『小野小町都年玉』（『紀海音全集』第二巻、昭和五十二年十一月二十五日、清文堂）。底本（正徳三、四年頃の正月か、版元正本屋西沢九左衛門版、大阪府立中之島図書館蔵）。
- ⑮ 『天和歌五穀色紙』（『古浄瑠璃正本集加賀掾編』第五、平成五年二月二十八日、大学堂書店。底本（板元山本九兵衛（推定）、東京大学教養学部国文学研究室蔵））。
- ⑯ 『七小町』（『竹本座浄瑠璃集』（一）、昭和六十三年六月二十五日、国書刊行会。底本（早稲田大学演劇博物館蔵））。

『諸道聴耳世間狙』における演劇作品の利用について

七二

⑫ 森山重雄『上田秋成初期浮世草子評釈』（昭和五十二年四月三十日、国書刊行会）。

⑬ ③に同じ。

⑭ 『御所桜堀川夜討』（『竹本座浄瑠璃集』二二）、平成七年十二月二十四日、国書刊行会。

⑮ 『釜淵雙級巴』（『續帝國文庫19』校訂並末宗輔浄瑠璃集）、明治三十三年二月二十八日、博文館）。

⑯ 『昔男春日野小町』底本（宝暦七年、版元山本九兵衛、早稲田大学演劇博物館蔵）。

〔付記〕

引用にあたり、引用文のルビは適宜省略した。